

令和5年6月9日

秋山卓男

美の原点 (6) 月

今回のテーマは月である。月といえば次の歌が思い浮かぶ、

「月影のいたらぬ里はなけれども、眺むる人の心にぞ住む」(法然 1133~1212) 浄土宗開祖の法然上人の読まれた歌である。月影の影とは光のことで、月の光の照らさぬ場所はないが、それを眺めた人だけが感動できるという事実を歌っている。古来、月の光は仏の慈悲を表現していると解された。太陽光が暑くてまぶしいのに比し、月の光は柔らかく、優しく感じられ、仏の慈悲として受け入れられたのであった。弥陀の本願によって衆生の死後の浄土行きは決定しているのであるが、その恩恵を受けることのできるのは、そのことを心から信ずることのできる人だけであることを表現している。妙好人と言われた浅原才市(1850~1932)は弥陀の大慈悲を感得し、感謝の一生を送った人であった。才市こそ月影を眺めた人であった。

日本では、いにしえより中秋の名月を祝う風習がある。すすきを花入れに入れ、お団子を供えて、静かに杯を重ねる奥ゆかしい風習である。

「月の沙漠」という童謡がある。1923年に作詞加藤まさを、作曲佐々木すぐるによって作られた唱歌である。王子様とお姫様が2頭の駱駝に乗って煌々と照らす満月の砂漠をゆったり進んでいく光景とメロデーと歌詞は日本人の誰もが思い浮かべる。この歌により月と砂漠のイメージは強くなった。



平山郁夫(1930~2009)の代表作「楼蘭遺跡を行く(月)」(2005年)は、遺跡の大仏塔を背景に砂漠を駱駝のキャラバンが進む。その全体を満月が照らしている。

平山郁夫には、遺跡を照らす満月の風景画に傑作が多い。「ブダガヤの大塔、インド」(1983)「アンコールワットの月」(1993)「皓月ブルーモスク(イスタンブール)」(1989)いずれの作品も群青を基調の色とし、黄金の満月が全風景を照らしている。

平山郁夫には異質な作品として「広島生変図」(1979)がある。15歳の時、広島で被爆した体験を基にした作品である。真っ赤に燃える広島の街の空高く不動明王が描かれていて、憤怒の表情で人々に「生きよ!」と叫んでいる。

横山大観(1868~1958)の「夜桜」(1929)は六曲一双の屏風の左隻に描かれた作品である。かがり火に照らされた桜と松、山影からのぞく満月が描かれている。この作品は1930年にローマで開催された日本美術展覧会に出品するために描かれたものである。ほかに「月下の流」(1911)「月夜」(1911)「洞庭秋月」(1912)がある。

東山魁夷(1908~1999)の「花明り」(1968)は、水平な山の上からの月明りに照らされた一本の桜の木の満開の花を描いたもので、月光に照らされた桜の花の美しさが見事に描かれている。「二つの月」(1963)はフィンランドに行き、森と湖の国で、空に輝く月と湖面に写る森と月を描いた幻想的な作品である。

能面と馬と月の作家、坂本繁二郎(1882~1969)は1964年から月のシリーズを描いている。「雲上の月」(1965)「月」(1965)「月光」(1968)「八女(やめ)の月」(1969)「幽光」(1969)がある。

川瀬巴水(1883~1957)は大正から昭和にかけて活躍した版画家である。「仙台山の寺」(1919)は藍色で統一され山寺の伽藍の上で満月の光が寺全体を淡い光で浮かび上がらせている。「月の松島」(1919)「陸奥三島川」(1919)海にそそぐ川と木造の家と藍色の空に満月が輝く「馬込の月」(1930)巴水の住んでいた馬込で、満月と大きな松と畑、松の枝の間の満月が印象的である。

白隠禅師(1685~1768)にも月を描いた傑作がある。「梅月」梅の花と満月「芋洗」満月の夜、老婆と子供が芋を洗っている。「水月観音」水に写った月を観音が見ている。

蠟燭の絵で有名な高島野十郎(1890~1975)は、月の絵の名手でもあった。「山の夕月」(1940)は山波の上に満月が描かれている。「有明の月」(1961以降)は木立の上の三日月を描き、8割は空で2割は木立である。「月」(1962)は、画布の上のほうに満月が光っていて、あとは暗い空だけが描かれ、下の方に白い雲のようなものが数片描かれている。野十郎は、月は観音様が現れ出る穴であるといっている。

フィンセント・ファン・ゴッホ(1853~1890)の代表作とされる「星月夜」(1889)は、精神治療のため入院していたサン＝レミ近くの療養院で製作された。画面左に見られる天と地を結ぶように伸びる糸杉、尖塔のある教会、画面の6割の空の中央のうねるように描かれた星雲のようなもの、画面右上の三日月の黄色の光、画面全体の藍色の色調、人間の存在がより大きな宇宙によって支配されていることを強調しているようである。



次号は、美の原点(7) 美とは何か を発行いたします。